

恐れず、ただ信じて

マルコの福音書 5章 21-43 節

はじめに

五月の第一週から四回に分けて、「信仰に生きる」というテーマで説教をしています。三回目の今日は、イエス様が、長血を患っている女の人の癒やされ、会堂司ヤイロの娘を生き返らされた出来事から「信仰に生きる」ということを学んでいきたいと思えます。

イエス様がガリラヤ湖の「向こう岸」から帰って来られると、大勢の群衆が集まって来ました。イエス様の御言葉を聞きに、あるいはイエス様の癒やしを求めて、大勢の群衆が集まって来たのです。

1. 会堂司ヤイロの信仰

その大勢の群衆の中に、「**会堂司の一人でヤイロ**」という人がいて、イエス様を見ると、その足もとにひれ伏して、「**私の小さい娘が死にかけています。娘が救われて生きられるように、どうかおいでになって、娘の上に手を置いてやってください**」と懇願したのです。

「会堂司」というのは、ユダヤ人の礼拝の場である会堂を管理する人のことです。建物の管理だけでなく、礼拝全体を準備し、礼拝の司会や説教者を選ぶことなどもしていたようです。つまり、会堂の建物と礼拝の責任を負うのが会堂司であったのです。会堂司は、一つの会堂に何人かいたようで、ヤイロはそのうちの一人でした。イエス様はこれまで、会堂で説教をしたり、悪霊を追い出したり、病人を癒やしたりしていました。ですから当然ヤイロも、イエス様の説教を聞き、イエス様の奇跡を見ていたのでしょう。

ヤイロには、小さい娘がいました。小さいと言っても赤ちゃんではなく、12歳の女の子です。ルカの福音書を見ると、ヤイロにとってこの子は「**一人娘**」(ルカ 8:42)であったとあります。ヤイロは12年間、たった一人のわが子を大切に育ててきたのでしょう。

しかしその大切な一人娘が、今にも死にそうな状況になってしまったのです。病気なのか事故なのか分かりません。長い間病気であったのか、突然の病気であったのか分かりません。しかしとにかく、死がこの一人娘を今にも呑み込もうとしていたのです。一刻を争う事態です。ヤイロは、イエス様が「向こう岸」から帰って来るや否や、イエス様の足もとにひれ伏して、娘のもとに来て、癒やして下さるようにと懇願するのです。

ヤイロは、イエス様を信じていました。イエス様が娘の上に手を置いてくだされば、娘は救われて生きられる、これがヤイロの信仰です。

2. 長血をわずっている女の人の信仰

イエス様は、ヤイロの願いに答えて、ヤイロの家に向かいます。すると、その場にいた大

勢の群衆も、イエス様の奇跡を一目見ようと一緒に付いて来たのです。

この大勢の群衆の中に、ヤイロと共にもうひとり、絶望の中でイエス様に近づいて来た人がいました。それは、「**十二年の間、長血をわずらっている女の人**」でした。「長血」というのは、女性特有の血が止まらない病気です。この病気をわずらっている人は、律法では「汚れた者」とされました。それゆえ、その人が寝た寝床も、その人が座った椅子も、それらに触れた人も皆、汚れるとされたのです（レビ記 15：25-30）。それゆえ、この病気をわずらっている人は、宗教的にも、社会的にも孤立した状態となるのです。

この大勢の群衆の中にいた一人の女性は、十二年という長い間、この病気をわずらい、宗教的、社会的に孤立した状態で生きていました。彼女はこの十二年間、何とかこの病気を治そうと、多くの医者を訪ねました。しかし当時の医療では彼女を治すことはできず、かえって法外な医療費を請求されて、持っている物をすべて使い果たしてしまったのです。そして彼女の病気は十二年の間に、治るところか、かえって悪くなる一方だったのです。

彼女は、病気そのものの苦しみに加え、宗教的、社会的な孤立、経済的困窮の中で、十二年という長い年月を生きてきた女性でした。その彼女が、イエス様のことを聞いて、ヤイロの家に向かう大勢の群衆に紛れて、イエス様のうしろからその衣に触れたのです。彼女は、イエス様の「**衣にでも触れれば、私は救われる**」と信じたからです。これが彼女の信仰です。

3. 「**だれがわたしの衣にさわったのですか**」

彼女は、大勢の群衆に紛れて、うしろからイエス様の衣に触れました。すると血が止まり、病気が癒されたことをからだに感じたのです。この時イエス様も、自分のうちから力が出て行ったことを感じました。そこでイエス様は、「**だれがわたしの衣にさわったのですか**」と言って、彼女を捜し始めました。イエス様の周りには、押し迫る勢いの大勢の群衆がいました。ですからイエス様の衣に触れた人は、数限りなくいたでしょう。この状況の中で、イエス様の衣に触れた誰かひとりを探すことに、何の意味があるのですかと弟子たちも言います。しかしイエス様は、彼女を捜すことを止めません。イエス様には、癒やされた彼女をそのまま立ち去らせることはできなかったのです。

すると彼女は、隠しきれないと思って、「**恐れおののきながら進み出て**」、イエス様の前に「**ひれ伏して、真実をすべて話した**」のです。彼女はこの時、イエス様にすべてを話しました。十二年間、長血をわずらって苦しんだこと、この病気のゆえに、宗教的、社会的に孤立して、経済的にも困窮していたこと、そのような中で、イエス様のことを聞いて希望を抱いたこと、しかし汚れた者であるがゆえに、群衆に紛れてうしろから衣に触ることしかできなかったこと、それでもイエス様を信じて、きっと救われると信じたことをすべて話したのでしょう。彼女の話聞いたイエス様は、彼女にこう言われます。「**娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。苦しむことなく、健やかでいなさい**」。

イエス様はなぜ彼女を捜したのでしょうか。イエス様はなぜ癒された彼女を、そのまま立ち去らせなかったのでしょうか。一つは、彼女の信仰を整えるためであったと思います。彼

女があのまま立ち去っていたなら、もしかしたらイエス様の衣に力があると思い込んで、この先ずっと生きていくことになったかもしれません。しかしイエス様は、「わたしの衣があなたを救ったのではない、あなたの信仰があなたを救ったのだ、あなたがわたしを信じたから、あなたは救われたのだ」と彼女に起こった出来事を、彼女に説明されたのです。こうして彼女は、自分がイエス様を信じたから癒され、救われたのだと理解したのです。イエス様は彼女に、正しい知識を与え、これからもイエス様への信仰に生きることができるよう、彼女を捜されたのではないかと思います。

もう一つは、彼女に信仰の告白をさせるためであったと思います。パウロはこう言っています。「人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです」(ローマ 10:10)。イエス様は、ただ心で信じるだけでなく、彼女の口から彼女の信仰を聞こうとされたのではないのでしょうか。私たちも、イエス様を心で信じるだけでなく、口で告白することが大切なのです。

三つ目に、イエス様は、彼女との人格的な交わりを求めたのだと思います。彼女があのまま立ち去ったら、イエス様との人格的な交わりがないまま、この先も生きていくこととなります。イエス様への信仰は、イエス様との人格的な交わりの中で育てられていきます。一方的な信仰では、私たちの信仰は保てません。だからこそ私たちも、毎週の礼拝の中で、また日々、聖書を読み、祈ることを通して、イエス様との人格的な交わりを大切にするのです。

四つ目にイエス様は、彼女を宗教的、社会的な孤立から解放しようとしたのだと思います。彼女の病気は、人目には治ったか、治っていないかは分かりづらい病気です。しかしイエス様は、大勢の群衆の前で、彼女は確かに治った、彼女はもはや汚れた者ではないと宣言することで、彼女を宗教的、社会的孤立から解放し、神様と人との交わりの中に生かそうとされたのではないのでしょうか。イエス様への信仰に生きる人は、イエス様との交わりだけでなく、人との交わりの中で生きることが大切です。だからこそ私たちは、教会の交わりの中で生きるのです。

イエス様は彼女を捜し、正しい知識に基づく信仰を与え、その信仰を告白させ、イエス様ご自身と人々の交わりの中に生かそうとされたのです。それこそが、彼女にとって、安心して、苦しむことなく、健やかに生きられる道だからです。イエス様は私たちをも捜しておられます。そして私たちが、正しい知識に基づく信仰を持ち、心で信じるだけでなく公に信仰を告白して、洗礼を受け、イエス様と教会の交わりの中で、安心して、苦しむことなく、健やかに生きることを望んでおられるのではないのでしょうか。

4. 「恐れなくて、ただ信じていなさい」

イエス様が道の途中で足を止め、彼女と関わっている間に、ヤイロの家から人々が来て、「お嬢さんは亡くなりました。これ以上、先生を煩わすことがあるでしょうか」と告げるのです。イエス様は間に合わなかったのです。もしかしたら、イエス様が足を止め、彼女と関わることがなければ、間に合ったかもしれない。ヤイロには、イエス様や彼女に対するやり切れない怒りがあったかもしれません。

ヤイロの信仰は、イエス様が娘の上に手を置いてくだされば、娘は救われて生きられるというものでした。娘が生きてさえいれば、イエス様がきっと何とかしてくれるというものでした。しかしヤイロの信仰も空しく、娘は死んでしまったのです。しかし、人々もヤイロも諦めかけたその時、イエス様はヤイロにこう言われます。「**恐れなくて、ただ信じていなさい**」。

ヤイロはイエス様を信じていました。しかし娘が死んだことによって、その信仰が途絶えようとしていたのです。しかしイエス様は彼に、「**恐れなくて、ただ信じていなさい**」と言われるのです。以前の改訂聖書では、その脚注に「**信じ続けなさい**」とありました。イエス様はここで彼に、信じることを止めてはならないと言われるのです。ヤイロは、イエス様を信じていました。しかし目の前の状況がどんどん悪くなり、最悪の状況になった、そこで彼は恐れて、信じることを止めそうになったのです。彼は、イエス様が病気を癒やすことができる方だと信じていました。しかし死が目の前に襲って来た時、イエス様を信じることを止めそうになってしまったのです。さすがのイエス様も、死に関してはどうすることもできないと思ったのでしょう。

イエス様は、ペテロとヤコブとヨハネだけを連れて、ヤイロの家に向かいました。ヤイロの親しい人々は、取り乱して、大声で泣いたりわめいたりしていました。するとイエス様は、「**どうして取り乱したり、泣いたりしているのですか。その子は死んだのではありません。眠っているのです**」と言われました。ヤイロの娘は確かに死にました。しかしイエス様にとって、死は「眠り」でしかないのです。イエス様は、死人を生き返らせる力があるからです。イエス様は、悪霊を追い出し、病人を癒やすことができる方であることを示されました。そして前回は、嵐をも静め、自然をも支配される方であることを示されました。そしてここでは、死人を生き返らせ、死をも支配される方であることを示されるのです。

イエス様は人々を外に出し、ヤイロとヤイロの妻、ペテロとヤコブとヨハネだけを連れて、娘の部屋に入って行きます。そして娘の手を取って、こう言われます。「**タリタ、クム**」「**少女よ、あなたに言う。起きなさい**」。すると少女は起き上がり、歩き出したのです。

イエス様は、ヤイロの信仰を越えた遥かに大きな方でした。私たちもイエス様を信じています。そしてヤイロのように、人生の様々な問題を抱えて、イエス様に懇願します。私たちにとって、それは「祈り」となって現れます。しかし、自分の願うようになかなか状況が進まない、むしろ状況がどんどん悪くなっていく、ついには最悪の状況になっていく、そういう時があるかもしれません。その時に大切なのは、「**恐れなくて、ただ信じていくこと**」「**信じることを止めずに、信じ続けていくこと**」ではないのでしょうか。イエス様は、私たちの信仰を遥かに超えた大きな方です。ですから私たちは、信じることを止めてはならないのです。

イエス様は、死人を生き返らせる方です。イエス様は、霊的に死んでいる人にも新しい命を与え、救いに導くことができる方です。誰かの救いのために祈っている方もいるでしょう。ヤイロのように、家族の救いを祈っている方もいるでしょう。目に見える状況は、決して良い状況ではないかもしれませんが。しかしイエス様は、「**恐れなくて、ただ信じていなさい**」と言われます。決して信じることを止めずに、信じ続けなさいと言われます。

天におられる私たちの父なる神様。

イエス様は私たちに、御自身への信仰を求めておられます。信仰によって、長血をわずらっていた女の方は救われました。また信仰によって、ヤイロと共にイエス様は歩まれ、試練の中でも「恐れなくて、ただ信じ続けなさい」と言われました。そして、信仰によって、ヤイロの娘を死から生き返らせました。イエス様は、悪霊を追い出し、病気を癒やし、自然をも支配し、死をも支配される方です。どうかあなたを正しい知識に基づいて信じ、その信仰を口で告白して公にし、イエス様と教会の交わりの中で、私たちの信仰を育ててください。そしてあらゆる試練の中でも、ただあなたを信じ続けることができますように。

特に、愛する者の救いを祈っている私たちを励ましてください。死人を生き返らせるあなたを信じ続け、霊的に死んだ者たちに新しい命、永遠のいのちをお与えください。

この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。